

# 地域連携活動キッズプラザさのたんの現状と今後の課題について — 学生指導に焦点を当てて —

The current situation of regional alliance activity called Kids' Plaza Sanotan and its future issues  
— Focusing on student advising —

久保田隆範<sup>\*1</sup>      木村光希<sup>\*2</sup>      小竹利夫<sup>\*3</sup>  
Takanori Kubota      Hiroki Kimura      Toshio Kotake

## Abstract:

This paper is a report about Kids' Plaza Sanotan that has been directed as one of the regional alliances activities since June in 2008.

We report activities of this year and extract issues and improvements especially focusing on student advising.

Furthermore, we are going to consider about how to make our project necessary for regions in the future taking into account improvements of quality, satisfaction and use of frequency to this project.

## キーワード：

子育て支援、学生指導、保護者との関わり、環境構成、あそびや遊具の提案

## I. はじめに

キッズプラザさのたんは、地域の入園前の子どもを対象とし、栃木県内に在るS短期大学（以下「本学」）施設の保育ルームの開放と遊び提供や絵本の読み聞かせの他に、本学教員による音楽リズム遊びや季節の製作などを行っている。さらに、本学教員や看護師による育児相談や発達相談を行っている。

本子育て支援活動は、平成20年6月より地域連携事業の一環として行われており、地域子育て支援活動の活性化や地域親子との交流、そして本学こどもフィールド学生の保育技術向上等を目的として開始された。

そして、地域に開かれた大学であることや、地域の中での子育て・子育て支援を目

指し、これまで本活動の実施を行ってきた。

本稿では、学生指導に焦点を当て、本年度の取り組み報告、課題や改善点の抽出を行う。そして、それらを通して、本子育て支援活動の質の向上と利用者の利用頻度向上等、今後更に地域にとって必要とされる活動としていけるよう考察を行ってきたい。

## II. 平成29年度 活動報告

### 1. 活動内容概要

#### (1) 実施日程・時間

平成29年5月24日～12月13日までの毎週水曜日（学生実習期間と夏休み期間は実施をしていない）で、実施時間は10:00～12:00に開催をした。

<sup>\*1</sup> 佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科

<sup>\*2</sup> 佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科

<sup>\*3</sup> 佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科

Sano Nihon University College Senior Lecturer

Sano Nihon University College Teaching Associate

Sano Nihon University College Associate Professor

表2 活動内容と利用者組数

	実施回数	開催日	曜日	内容	組数	大人	子ども	人数
平成 29 年度	第1回	5月24日	水	手遊び・絵本の読み聞かせ・ちょうちの色塗り	5	5	5	10
	第2回	5月31日	水	手遊び・ダンス	19	19	21	40
	第3回	6月7日	水	手遊び・ダンス・ペープサート	15	15	19	34
	第4回	7月5日	水	音楽リズム・絵本の読み聞かせ・手遊び・ペープサート	10	10	10	20
	第5回	7月12日	水	宝探し・手遊び・絵本の読み聞かせ	9	9	9	18
	第6回	7月19日	水	手遊び・絵本の読み聞かせ・魚釣り遊び	6	6	6	12
	第7回	7月26日	水	製作活動「魚のウロコシール貼り」・ゲーム・ダンス	13	13	18	31
	第8回	8月2日	水	手遊び・絵本の読み聞かせ・ダンス	10	10	11	21
	第9回	10月11日	水	手遊び・手袋シアター・絵本の読み聞かせ・ダンス	9	9	9	18
	第10回	10月18日	水	手遊び・絵本の読み聞かせ・製作活動「ハロウィン」	8	8	8	16
	第11回	10月25日	水	手遊び・絵本の読み聞かせ・体遊び・パネルシアター	10	10	11	21
	第12回	11月1日	水	手遊び・絵本の読み聞かせ・ダンス	12	12	13	25
	第13回	11月8日	水	手遊び・パネルシアター・ダンス	4	4	4	8
	第14回	11月15日	水	手遊び・ペープサート・読み歌い・ダンス	7	7	9	16
	第15回	11月22日	水	手遊び・絵本の読み聞かせ・宝探し	11	11	12	23
	第16回	11月29日	水	手遊び・絵本の読み聞かせ・製作活動「きのこ」	13	13	14	24
	第17回	12月6日	水	音楽リズム・手遊び・絵本の読み聞かせ	11	11	12	23
	第18回	12月13日	水	手遊び・紙芝居の読み聞かせ	7	7	9	16
合計					179	179	200	376

(2) 実施学生数

佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育 学科子どもフィールド 2年生 99名。

尚、各回4～6名のグループに分かれて実施をした。

(3) 教職員数

基本的に毎回筆者3名が参加をし、学生指導とサポートを行う。月に1度看護師が参加し、保護者に対する子育て相談等を行う。

(4) 活動内容と利用者組数

表1にもあるように、親子の合計利用組数は179組(内、大人が179名で子どもが200名)で、合計376名の利用であった。

(5) 活動の基本的な流れ

10:00～11:00	自由遊び
11:00～11:30	学生の活動
11:30～12:00	自由遊び

学生の活動とは、手遊びや絵本・紙芝居、パネルシアターなど、学生自ら考えた活動を行い、子どもたちと触れ合い保育をしていく活動を指す。

(6) 広報活動内容

佐野地域での認知度の拡大と利用頻度向上を目的に、広報活動を以下の通り実施した。

- ・ 本学ホームページ上での常設バナーの設置
- ・ 市内近隣保育園へのチラシの設置
- ・ 佐野市子育て情報誌への掲載
- ・ 28年度に関しては新聞掲載も実施

III. キッズプラザさのたん実施に向けての取り組みについて

1. 事前・事後指導の内容と方法

事前指導における、具体的な実施内容は下記の通りである。

- ①キッズプラザさのたん内での、学生の活動の内容検討及び指導案の作成。
- ②キッズプラザさのたんで使用する遊具や備品類等の準備時間として実施。
- ③上記を踏まえての学生の活動のシミュレーションと振り返り、課題抽出の実施。  
シミュレーションでは保育ルームを使用し、実際の場面を想定した上で練習を行った。また、活動を実施する学生と親子役をする学生の役割設定を行い、出来るだけ本番に近い状態のもとで実施をした。
- ④キッズプラザさのたん実施後、自身の振り返

り映像を見てもらうようにした。その他、教職員からも気づいた点をフィードバックし、課題や改善点の抽出を行った。

学生への指導において、特に注力した点は以下の通りである。

#### (1) 学生活動施時における進行の明確さ

キッズプラザさのたんの全体の流れとして、親子入室後、約1時間の自由あそびの時間がある。その後、学生の活動に移行する流れがある。

事前シミュレーションの中では、利用者に向けた活動を始める声掛けや合図が明確ではなく、親子役の学生達が困惑する姿が見られた。また、活動内における進行においても利用者へ向けた明確な声掛けや、次に行う活動の提示などがないため、親子役の学生達の注目を維持することができず、集中力が切れてしまう場面もあった。

その為、指導の中では繰り返し「はじめと終わり、次の活動の明確さ」をきちんと提示することを指導した。

具体的には下記の通りである。

- ① 声掛けによる提示
- ② 立ち居振る舞いによる提示
- ③ 人員配置の工夫

#### ① 声掛けによる提示

声掛けによる提示では、声の大きさやトーンを意識し、ゆっくり話すことなど、利用者が聞きとりやすく、注目を向けるためにはどうしたら良いかを指導。また、具体的な声掛けの手法として、挨拶とこれから活動を始める旨を明確に伝えるよう指導を行う。

#### ② 立ち居振る舞いによる提示

話している人が誰か、もしくは注目を集めたい人は誰なのかが、視覚的に認識でき

るよう、工夫をするよう伝える。具体的には、身振り手振りといった動作はもちろん、立ち位置の配慮などである。

#### ③ 人員配置の工夫

学生全員が前にいるのではなく、一つ目の活動中に、次の活動の環境構成や準備にまわる人員配置の工夫や、集中力が持続しない子どもへのケアにあたる学生の配置など、利用者が学生の活動に集中できる環境を構成すると同時に、スムーズに活動を進められるよう工夫することを伝えた。

これら3点に共通する事項として、ノンバーバルコミュニケーションの意識と工夫が、利用者を引き付ける大きな要素になることを学生に向けて指導をした。

#### (2) 子ども一人ひとりに応じたあそびや遊具の提案

過去のキッズプラザさのたんの実際の映像資料をもとに、キッズプラザさのたんに来る主軸の年齢層(8か月頃～2歳)の子どもが好む遊びや遊具、また気持ちの読み取り方等について解説した。自由遊び場面では、玩具を介して子どもと大人の間楽しいやりとりが活発に起きることを目指した。そのためには、子どもが喜びそうな玩具を提示し、子どもが始めた遊びに大人が反動的に応えることが大事であることなどを指導した。

#### (3) 保護者との関わり

実習では子どもと関わるが保護者と関わる機会は少ない。そのため、多くの学生は保護者との関わりに苦手意識を持っている。そこで、子どもの名前や年齢や好きな遊びなどを聞くことで会話のきっかけを作ることを助言した。また、子どもの気持ちを受止めることが大切であるのと同じように、保護者の話を聴き、気持ちを受止めることが大切であることを伝えた。

#### (4) 居心地の良い環境構成の在り方

利用者にとって居心地の良い環境の視点の一つとして、初めての利用でも使い勝手が明確にわかることが一つの要素であると考えられる。その為、遊びの種類によってコーナーを分け、利用しやすくすると同時に安全性の確保や子どもが一定の遊びを集中して行えるように配慮をした。コーナーの設定として、(i) 絵本コーナー (ii) ごっこ遊びコーナー (iii) ブロックコーナー (iv) 手作り遊具コーナー (v) からだあそびコーナーを設定。(グループにより、コーナー内容に変動はある)

### IV. 評価

#### 1. 活動報告書及び振り返りレポートから

本子育て支援活動は、毎週担当学生が交代をしながら活動を行っている。活動終了後には活動報告書の作成、また全日程終了後には振り返りレポートを作成させている。これは実施学生が準備段階での計画に対して実践結果がどうであったかの考察や、振り返りなどを記録に残すことを目的に実施している。以下に、活動報告書と振り返りレポートの内容を要約する。

##### (1) 感想

- 子どもが遊んでいる際、母親と目があったり、不安になったりすると母親のもとへ行き、落ち着くとまた遊び始める姿が見られ、母親と子どもの信頼や愛着といった関係性がわかる場面を見ることが出来た。
- 母親が「どうぞ」と言って玩具を渡すと、母親の真似をして「どうぞ」とやるなど、身近なやり取りを子どもが模倣して遊ぶ姿が見られた。
- ダンスを親子で踊ったり、体を揺らしたり手を叩いている姿が見られてよかった。
- 親子で手遊びや絵本、紙芝居を楽しめ

ていた。

- 授業で習った「人見知り、場所見知り」について実践で体験できた。
- 保育の現場で臨機応変に対応することの大切さを実感した。
- どの年齢の子どもたちも楽しめるような活動を考えていく必要があると感じた。
- 就職や実習前に子どもと関わることが出来て配慮すべきところにも気づくことが出来た。
- 保護者の方と関わる中で、寄り添うことや傾聴の難しさを感じた。

##### (2) 課題・改善点

- 保護者の方から「もし、机の上に子どもが乗ってしまったら何て言ってやめさせたらいいですか。」との質問に対しすぐに答えられなかったので答えられるようにしたい。
- 「貸して」が言っても「どうぞ」「いいよ」に繋がらずその対応に困ってしまい、保護者が近くにいるという事であやふやに流してしまった所があった。
- 保護者から指摘を受けいろんな場面を想定して準備するべきだった。
- 想定していたよりも年齢が低かった為、活動内容が難しくなってしまった。
- もっと参加型の活動を入れたらよかった。
- 絵本に興味を持った子どもが目の前に来てしまいその対応の仕方をお考えよかったです。

#### 2. 利用者アンケートから

キッズプラザさのたんの実施にあたり、利用者アンケートの実施を行った。倫理的配慮として、研究目的、得られたデータは研究目

的以外に使用しないこと、無記名であり回答者は特定されないこと、調査票の提出は自由であることを調査依頼書に明記した。

アンケート実施における概要は以下の通りである。

(1) アンケート実施期間

平成 29 年 11 月 8 日（第 13 回）～ 12 月 13 日（第 18 回）

(2) アンケート実施対象

上記期間中にキッズプラザさのたんを利用した保護者。（アンケートは初回利用時のみ）

(3) アンケート回答人数

29 名

(4) アンケート結果

①利用して良かった点

- ・親子で楽しむことが出来た。
- ・手作りおもちゃが面白い。
- ・プレゼントがうれしい。

※毎回、学生が紙でメダルやアンパンマンのお面等を作製してプレゼントした。

②キッズプラザさのたんへの要望

○実施回数を増やしてほしい。

※ 2 年生が実習で不在になる 6 月、8 月、9 月や春休みの 2 月、3 月などは開催していない。

○体が動かせる遊具が欲しい。

○手作りのおもちゃの作り方を教えてほしい。

○エプロンシアターやパネルシアターなど普段見られないのをやってほしい。

3. 記録映像による分析評価

事前指導での内容を踏まえ、実践内でどの程度実施が行えていたか、記録映像を元に分析、評価を行った。

(1) 学生活動実施時における進行の明確さ

①声掛けによる提示

学生の活動開始時における利用者への提示は、各グループ明確に行っていた。具体的には、最初の全体に向けた挨拶に始まり、保育ルーム中央へ集まってもらうように呼びかけを行う。そして、これから行う活動内容を子どもたちが興味を持てるように、クイズ形式にしたり季節になぞらえて紹介するなどの工夫が見られた。

②立ち居振る舞いによる提示

声掛けによる提示と合わせて、視覚的な印象付けという点で各グループの工夫が見られた。具体的には、注目を集めたい学生もしくは、話しをする学生が手を挙げながら、利用者に向けて内容の説明をする姿見られた（写真 1）。

また、学生が全員一列に並んでいる中で、他の学生よりも一歩前に出て話をするなど、立ち位置における配慮も見られた。



写真 1 利用者に見えやすいようにジェスチャーを大きくしながら声掛けをする学生



写真 2 ひとりで行動する子へ付き添う学生



## ③ 人員配置の工夫について

活動が始まると、全員が前にいるのではなく活動に合わせた人員配置が行われていた。具体的には、読み聞かせやペープサートの際には、担当者のみが前に出て活動を行っていた。他学生は、利用者側にまわり、集中が持続しない子どもへのケア等に当たっていた（写真2）。その他にも、読み聞かせ後の活動の準備にあたる学生を配置することで、スムーズに次の活動に移行できるよう配慮されていた。

## (2) 子ども一人ひとりに応じたあそびや遊具の提案

学生は保育ルームにどんな玩具があるか事前に把握していないため、最初は教員が玩具を学生に渡すことが多かった。また、まだ自分の気持ちを言葉で伝えられない子どもの気持ちを見落とす場面が見られた。

しかし、子どもと関わり続けるうちに、その子が好きな遊びや遊具、またその子なりの気持ちの伝え方が分かり、適時・適切・適度な援助ができるようになっていった。実際に子どもと関わることで、学生が子どもを見る目や子どもとの接し方を学習する姿が見られた。

学生の報告からも「子どもと同じ目線になって関わった」「子どもの気持ちを受け止め、言葉をかけた」といった感想が多く寄せられた。

## (3) 保護者との関り

学生により、大きく差が出る項目であった。多くの学生が保護者とのコミュニケーションに苦手意識を持っており、初めから積極的に声掛けをする姿が見受けられなかった。それでも、保護者から話し掛けられるうちに緊張も和らぎ、後半は保護者と楽しそうに会話をする姿も増えてきた。学生は保護者から子どもの最近の成長を聞いたり、子育ての悩み

(人見知りや危ない事をした時の注意の仕方など)を相談されたり、手作りおもちゃの作り方を質問されたりしていた。学生からは「実習では保護者の方と交流することがなかったので、貴重な体験ができた」「子育ての喜びだけでなく、苦労や不安も聞くことができ勉強になった」といった感想が寄せられた。

## (4) 居心地の良い環境構成の在り方

事前指導を踏まえ、実施グループごとに各コーナー設定や遊具配置を行い、心地よい環境構成に努めていた。環境構成を行うにあたり、学生が重要視していたポイントとして、①保護者がゆったりくつろげるスペースが確保できるか②学生の活動の際の導線の確保③子どもが遊びやすいよう、敢えて一部あそびかけの状態を作っておくこと、などがあった。

## V. 考察

平成29年度のキッズプラザさのたんの実施を通して、利用者満足度の点と、学生への指導の2点から考察をした。

## 1. 利用者満足について

過去3年間の利用者数推移を出し、利用傾向からの分析を行った。

年間利用者数の比較をすると本年度はこれまでで最多の利用であった。

昨年度は5月に新聞3社に掲載された影響もあり、利用者数を伸ばしたが、その後はほぼ例年通りの利用者推移であった。今年は、4月に本学ホームページ上に常設バナーを設置し、利用者が情報をキャッチしやすい状態を作った為、ホームページでの情報を基に利用される方も多くいた。以上のことから、広報における一定数の効果が見て取れる。

利用者満足の点においてはアンケート結果や今年度の利用者数の推移などから概ね満足度の高い結果になったと考える。

その根拠として、昨年度との比較の中で、全体利用者数は前年比109%と増加している

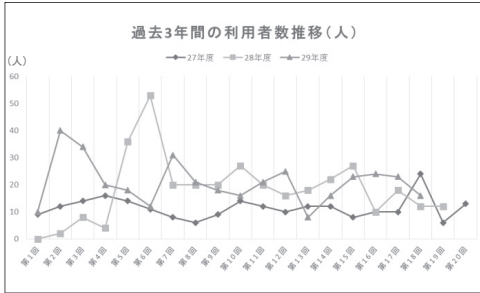


図1 過去3年間の利用者推移

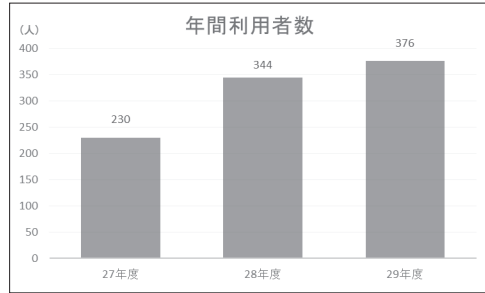


図2 各年次の年間利用者数

ことと同時に、後期の9回分での比較においても今年度は132%となっており、後期に入っても利用者数が減少することがなかったことが挙げられる(図1、図2)。

この背景には、学生の活動内容や、学生の保護者との関りが十分に取れており、利用者の満足度を維持できたことによるリピーターの獲得に繋がったことが考えられるのではないだろうか。

## 2. 学生指導について

学生への指導においては、筆者ら3名で手厚く行えた。

昨年度までになかった取り組みとして、事前指導の中で実際のキッズプラザさのたんの映像を見た後に、実際に保育ルームを使用し、学生の活動のシミュレーションを行った。これにより、学生にとっては、より活動のイメージが湧いたのではないだろうか。また、PDCAサイクルの意識についても繰り返し指導を

行った。具体的には、学生の活動に対する自己評価と同時に、他学生によるコメントシートによる評価のフィードバックを実施。シミュレーション終了時と本番終了後の2回繰り返すことにより、PDCAサイクルを2回繰り返すことになる。それにより、実施者の内容改善はもちろん、これから活動を行う学生にとっても、先に活動を行った学生の内容が参考となり、事前の修正等が加えられ、内容のブラッシュアップがなされていた。その為、後半の実施学生になるほど、事前指導の内容が十分に行き渡り、利用者にとっても満足度の高い内容になっていったのではないかと考えられる。

## 3. 学生の活動内容について

### (1) 評価できる点

①はらぺこあおむしの大型絵本を使用した読み歌い(写真3)

絵本を読み聞かせるだけでなく、ピアノ



写真3 はらぺこあおむし 弾き歌い



写真4 バスにのって

を使用し音楽に合わせて読み歌うことで、子ども達も一緒に音楽を楽しみながら、絵本に集中する姿が見られた。また、保護者も一緒に歌を歌う姿が見られ、自然と絵本の世界観に入っていける工夫がなされていた。

## ②親子での触れ合いあそび（バスにのって） （写真4）

親子参加型の活動である。保護者の膝の上に子どもが乗り、子どもが運転手になり、音楽に合わせて一緒に身体を使う触れ合いあそびである。

親子間だけでなく、学生とも相互的なコミュニケーションが生まれており、適切な活動内容であると考えられる。

## （2）課題・改善点

実施を通しての、今後の課題は以下の通りである。

### ①保護者とのコミュニケーション

前述にもあるように保護者とのコミュニケーションに対する学生の苦手意識をどのように取り除いていくかが課題の一つである。日頃からの経験や慣れが大きく影響する部分ではあるが、事前指導において相談援助の在り方やコミュニケーションワークの仕方など、実践形式をもとに行っていく必要がある。

### ②活動内容の偏り

保護者アンケートでは、「普段家庭ではできない活動を行ってほしい」や「音楽を使った活動をしてほしい」などの要望があった。

本年度の学生の活動では、各グループ工夫を施した内容にはなっていたが、傾向として、ダンス、手遊び、読み聞かせの割合が多かった。その為、利用頻度の高い利用者にとってはあまり代わり映えのしない印象になってしまったことが考えられる。

来年度においては、全体のバランスを

考慮した内容設定等を行っていく必要がある。

## VI. おわりに

本稿では、これまでの取り組みについて、中でも学生指導に焦点を当て報告をしてきた。冒頭でも述べたように、本年度の活動を通しての課題や改善点の抽出を行い、本子育て支援活動の質の向上と利用者の利用頻度向上等、今後更に地域にとって必要とされる活動としていくことが大きな目的である。

これまでの考察を踏まえて、改めて我々教職員による学生への適切な指導が、利用者満足へ大きく影響することがわかった。今回、学生指導をするにあたり大切にしてきたことがある。それは、関わり方や立ち居振る舞いといった技術的な面だけではなく、キッズプラザさのたんに利用者は何を求めているのか、なぜ必要なのか、といった子育て支援に求められるホスピタリティの面やこの活動が必要とされる社会的背景などにおいても学生が十分に理解した上で実践に臨めるよう、多角的に指導を行っていくことを心掛けた。これらのことは今後も引き続き、学生指導において注力していかなければいけない点であると考えられる。

実施にあたっては、学生の人数が多いので、キッズプラザさのたんの担当は一人1回しか回ってこない。その1回限りの関わりを、学生はとても楽しみにしていた。学生は、子どもの保育はもちろん、事前の準備から終わった後の片付けまで積極的に努めてくれた。

利用者との関りの中で、子育ての喜びと苦労を実際に知る機会となると同時に、キッズプラザさのたんが子育てをする母親にとって大きな支えになっていることも実体験の中で理解をすることが出来た。また本活動を通して学んだことが実習先においても生かされる場面があったと各学生より報告があり、実習指導にも繋がる有益な機会になっていると言



えるのではないだろうか。

本学の子育て支援活動を通して、子どもも保護者の方も、楽しい時間を過ごし、笑顔で帰っていった。その姿に接して、キッズプラザさのたんが地域の子育て支援に貢献していることを強く実感することができた。今後も更なる充実を目指して、学生の保育力を高める努力をしていきたい。

### 参考文献

- 高橋登美子(2011)「キッズプラザさのたん」の現状 - その実践報告と子育て支援の必要性に関する論考 - pp.149-155 佐野短期大学研究紀要 第22号
- 西村麻希・西村侑香里・田中麻里(2016) 地域における子育て支援活動「子どもミュージアム」に参加した学生の意識の変化について—学生アンケートの内容分析を通じた“実践的学び”の検証— pp.1-13 西九州大学子ども学部紀要 No.8
- 山本千紗子(2009) 乳幼児に話しかけること・褒めることの大切さ —子育て支援のためのエビデンスを求めて— pp.19-25 上武大学看護学部紀要 第5巻

### 謝辞

本稿を作成するにあたって、キッズプラザ利用者の保護者から写真掲載とアンケート利用の許可を頂きました。

ここに感謝致します。